

<研究主題>

自ら考え、判断し、表現する力を育む授業づくり
～ 共に学びを深め、自分の思いを育む読解力の育成 ～

- 1 単元名 中心となる人物の気持ちを考えながら読んで感想を伝え合おう
(サーカスのライオン)

2 めざす児童の姿

(1) 本単元で付けたい力

本校では「自分の思いを育む読解力」の育成をめざしている。それは、全国学力・学習状況調査や、山口県が実施している年2回の学力に関する確認問題の結果から、長文を読み取ったり、文章等から読み取ったことをもとに条件に応じて自分の考えを表現したりすることに課題が見られたからである。

「自分の思いを育む読解力」とは、記述されている事柄や内容を根拠にして、自分の考えをまとめ、意味付ける読み(解釈)を促しつつ、さらに、その子なりの感想の形成を促すということである。ここでいう感想とは、読み取って解釈したことを、自分の経験や知識、また身の回りのことと重ね合わせてじっくり考えたことにより育まれた読み(熟考・評価)だと考える。この感想の形成には、多くの仲間との交流が重要で、そこには「そうかなあ」「そんな考え方もあったんだ」「やっぱりこうだ」と、思考力・判断力が働く場面があり、それを自分なりの言葉で表現する学習が期待できる。これまでも、共に学びを深める場を設定して、教材文、友達、自分自身との対話から、根拠にもとづいた思考・判断を促して自分の読みを育み、それを表現する(話す、書く)授業をめざして研修を深めてきた。

一方、学習指導要領第3学年及び第4学年「C読むこと」の文学的な文章の解釈に関する指導事項には、「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」とある。また、自分の考えの形成及び交流に関する指導事項には、「文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと」とある。

以上のことから、本単元では、下記の2つのことを『付けたい力』として設定し、授業を構想していくことにする。

- ① 登場人物の気持ちの変化を、それが分かる言葉に着目しながら想像して読む。
- ② 自分の感想をもち、友達と同じところや、違うところに気付く。

(2) 付けたい力に関する児童の実態

本学級の児童は、3年生になって「ゆうすげ村の小さな旅館」の教材文を通して、つぼみさんと美月さん、二人の登場人物の気持ちが表れている叙述を、会話や行動に着目しながら見つけ、想像しながら読むことを経験している。この単元では、「ゆうすげ旅館にいる二人に伝えたいことを手紙に書いて送るために、どんな気持ちでいるのか読み取ろう」という読みのめあてを設定した。旅館に見立てた手作りの箱に、手紙を書いて投函する活動をとっても楽しみにしていた児童は、二人の気持ちをじっくり読み取る学習に、大変意欲的に取り組んだ。個人差はあるものの、手紙という手段を通して、登場人物や友達と対話し、気持ちを想像することができた。また、「ゆうすげ村の小さな旅館」の本に収められている他の話を読む並行読書にも取り組み、つぼみさんの気持ちや物語のしかけを想像しながら手紙を書く言語活動につなぐこともできた。しかし、児童の感想を見ると、自分の経験や知識、また身の回りのことと重ね合わせて書くまでには至っておらず、印象に残った場面について理由を添えながら書いたり、二人のやさしさに共感して書いたりしたものが多かった。

共に学ぶことに関しては、全体での学び合い以外に、ペア、または3人班による小集団学習を数多く経験している。年度当初、班での話合い活動はリーダーを進行役とし、発言の仕方など、約束事に基づき行っていた。しかし、自分の考えをただ発表するだけの活動に終始することが多く、深まる話合いにならなかった。1学期途中からは、自由に発言し合うフリートークによる対話に変えたところ、少しずつだが相手の意見を受けて話す姿も見られるようになってきた。また、考えを十分にまとめきれない児童も、友達の話の聞いたり質問されたりしながら、話合いに少しずつ参加できるようになってきている。

3 教材観

本単元の教材文は、単調な生活の繰り返しにやる気を失っていた主人公であるライオンのじんざが、ある男の子との出会いを通じて、やる気と前向きな力を取り戻していく、温かい心の交流を描いた作品である。児童は、魅力的な登場人物や衝撃的な結末に引きつけられ、命を投げ出してまで男の子を救い出す場面や、唯一じんざのいない最後の場面で、様々な想像を巡らせながら、自分なりの読みをつくると考えられる。また、読み取ったことをもとに、じんざのことをどう思うか、伝えたいことを文章にまとめる中で、感想の形成を促すことも大いに期待できる作品である。

この他に、教材文の特性として、登場人物が少なく主述が明確で人物の言動が分かりやすいことや、気持ちを想像しやすい会話文の多い点が挙げられる。また、文中には、じんざの動きや体の様子を表す言葉、そして目の色の表現が数多く描写されていて、そこから気持ちをくわしく読み取れることから、本学級の児童に、前述の「付けたい力」を育むのに適した作品であるといえる。さらに、比喻、擬音語、擬態語、倒置法といった表現技法が文章の中に効果的に使われており、児童がイメージをふくらませながら読む手助けになると考えられる。

4 指導観

指導にあたっては、めざす児童の姿（付きたい力とその実態）及び単元の特性を考慮し、以下のことに留意して授業改善に取り組みたい。

- ・ 児童の初発の感想は、火の中に飛び込み命がけで男の子を助ける場面と、じんざのいない最後の場面に集中すると考えられる。そこで、第一次では、「最後の場面でお客が一生懸命に拍手をしたのはなぜか」という疑問の重なりを取り上げ、「お客もライオンつかいのおじさんも、じんざがなぜ男の子を助けたのか、その理由は分かっているのではないのか。」と問いかける。ここから「じんざの気持ちを日記に書かためて、誰も知らなかった“じんざの心の中を語る会”をしよう。」という読みのめあてを児童とともに作り、物語を読み進めるようにする。さらに、この会に向けた見通し（具体的なイメージ）をしっかりとつことができるように配慮する。そうすることで、第三次で行うこの会に向け、児童は、教材文を読む意欲を持続させるとともに、中心人物であるじんざの気持ちの変化を、叙述に即して読み取る必然性が生まれるものとする。
- ・ 日記を書く際は、友達と交流して読み取ったじんざの気持ちを書き込むだけでなく、「じんざのことをどう思うか」「じんざに伝えたいことは」等も合わせて書くよう促し、「じんざの心の中を語る会」での読みの交流につなげたい。
- ・ 第二次では、繰り返し用いられる目の表現に着目して、それぞれが、じんざのどのような心情を表しているのかを叙述に基づいて読み取る学習を展開したい。目に関する表現がない場合でも、その表現を考えるよう促すことで、じんざの気持ちを想像することができるようにしたい。
- ・ 毎時間の授業の終わりには、「学習のめあて」と「友達の考え」についての振り返りを書くよう促すことで、自分の読み深めを自覚し、共に学び合うよさと楽しさを共有することができるようにする。

5 目標

(1) 「じんざの心の中を語る会」への関心をもち、じんざの気持ちの変化について交流するために心情を表す叙述に着目して読もうとすることができる。

【国語への関心・意欲・態度】

(2) 中心人物であるじんざの気持ちの変化を、叙述を基に想像して読むことができる。

【読む能力】

(3) 体の一部分を用いた表現の中には、登場人物の心情を表す働きがあることに気付く。

【言語についての知識・理解・技能】

6 指導評価計画（総時数 10 時間）

次	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価の観点			評価規準（評価方法）
			関	読	言	
第 一 次	○教材文を読んで初発の感想を書く。 ・心に残っていること ・みんなで話し合いたいこと	初発の感想を書く観点を示し、焦点をしばって次時に話し合いができるようにする。	○			教材文を進んで読み、感想にまとめている。 (ノート)
	○中心人物がじんざであることを確認し、じんざの気持ちの変化を読み取ることをねらった学習計画を立てる。 ・じんざの心の中を語る会への見通しをもつ（毎時間の日記等） ・読み深めたい課題の設定（目の色に着目して）	児童の初発の感想を事前に整理しておき、どのあたりに思いが集中しているか、一目で分かるようにして、学習計画を立てやすくする。	◎		○	全文を読んで作品のあらすじをとらえ、初発の感想を発表しながら、学習計画を立てている。（発表）
	○難易語句、擬音語、擬態語について調べたり話し合ったりする。	難易語句を全員で共有する場をもち、実際に調べる言葉を選別する。			○	国語辞書を使って、難易語句を早く調べている。 (調べ方、ノート)
第 二 次	○サーカスの中で長い間過ごしてきたじんざの境遇や気持ちを読み取る。 ・目が白くにぎっていたのはなぜか ○「じんざの心の中を語る会」に向け、グループで話し合う。	児童の読み取りの状況に応じて、挿絵を効果的に示すことで、この場面のじんざの気持ちを共有できるようにする。		◎	○	じんざがやる気を失っていることを読み取っている。 (発表、日記)
	○男の子と出会ったじんざの気持ちの変化を読み取る。 ・目の表現がないが、どんな目をしているか考える。 ・じんざが手をふりながら思っていたことはなんだろう。 ○「じんざの心の中を語る会」に向け、グループで話し合う。	叙述に表されていない目の表現を考えるよう促すことにより、じんざの気持ちを叙述に基づいて想像するきっかけにする。			○	男の子との出会いで、じんざの気持ちが喜びに満ちあふれ、生き生きしてきたことを読み取っている。 (発表、日記)

第 二 次	<p>○男の子との交流によって、じんざの喜びと愛情がふくらみやる気が満ちてきた様子を読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目を細くしていたのはなぜか ・目がぴかっと光ったのはなぜか <p>○「じんざの心の中を語る会」に向け、グループで話し合う。</p>	<p>それぞれの目の表現から想像できる気持ちを比較するよう促し、それらを板書上で視覚的に捉えられるようにすることで、じんざの気持ちの変化に気付くことができるようにする。</p>	◎	○	<p>じんざが以前の自分を取り戻した瞬間の気持ちを読み取っている。(発表、日記)</p>	
	<p>○火の中に飛び込むじんざの気持ちを想像する。【本時】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目の表現がないが、どんな目をしているか考える。 ・絶対に助けたいというじんざの思い <p>○「じんざの心の中を語る会」に向け、グループで話し合う。</p>	<p>なぜ命をかけてまで飛び込んだのか、その思いが表現されている叙述を問うことで、叙述を基にじんざの気持ちをより深く想像できるようにする。</p>		○		<p>男の子を助けたときのじんざの気持ちについて自分なりの読みをつくっている。(発表、日記)</p>
第 三 次	<p>○「じんざの心の中を語る会」で話す文を書き、グループでの発表準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ男の子を助けようと思ったのか、本当の訳は ・じんざに伝えたいこと 	<p>日記を参考にして書くよう促すことで、これまで読み取ってきたじんざの気持ちの変化から、男の子を助けた本当の理由を想像することができるようにする。</p>		○		<p>日記を参考にしながら、じんざの心の中を語るための文章を書いている。(作文)</p>
	<p>○「じんざの心の中を語る会」の発表準備をする。</p>	<p>適宜グループへの助言を行う。</p>		○		<p>発表準備に意欲的に取り組んでいる。(準備態度、振り返り)</p>
	<p>○「じんざの心の中を語る会」を開き感想を交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時に書いた真相 ・感想の交流 	<p>1グループずつ単独で発表する場を設けることで、友達の読みや感想をじっくり聞くことができるようにする。</p>	◎	○		<p>じんざの心の中を語ったり、自分の感想を進んで話したりしている。(発表)</p>

7 本時案（第二次 4 / 4 時）

- (1) 主 眼 表現されていないじんざの目についての表現を考えるを通して、じんざの強い思いについて自分なりの読みをつくることができる。
- (2) 準備物 これまでの学習をまとめた掲示物、ワークシート、日記
- (3) 授業の流れ

学習活動・内容	主な発問 (T)・教師の働きかけ (○)・評価 (◎)
前時の学習	男の子との交流によって、じんざの喜びと愛情がふくらみ、やる気が満ちてきた様子を読み取る。
1 本時の課題をつかむ。 ・ p17L9 ～ p21L5 の音読。 ・ りょう手で目をおさえた。	T これまで、じんざの目に注目して気持ちを読み取ってきました。この場面に、じんざの目についての表現がありましたか。 ○ 「りょう手で目をおさえた」という叙述に着目している児童の発言を取り上げ、第二場面の目の表現と比較するよう促すことで、児童がじんざの気持ちの変化に問いの意識をもつようにした上で、本時の課題を提示する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 火の中にとびこみ男の子を助けようとするじんざが、どんな目をしていたかを想ぞうしながら、じんざの気持ちを考えよう。 </div>	
2 課題について自分の考えをワークシートに書き、話し合う。 ・ 「○○な (の) 目 なぜなら～」 ・ 金色に光るじんざ ・ 男の子への思い ・ 命をかけた行為	T 文中の言葉を手がかりにして、じんざの目を「○○な (の) 目」と表現しましょう。そして、そのときのじんざの気持ちを考えて、ワークシートに書きましょう。 ○ 根拠となる叙述とともに、そこから想像できるじんざの気持ちも述べるよう促すことで、じんざの「男の子を助けたい」という強い思いに気付くことができるようにし、次の発問につなげる。 T なぜ、命をかけてまで男の子を助けたかったのかな。 ○ 日記を振り返るよう促したり、じんざの気持ちの変化を記録した掲示物を見せたりすることで、じんざが命をかけた理由について考えることができるようにする。 T 金色に光るライオンのじんざは、どんな目をしていたのかな。
3 じんざの気持ちを思いながら、日記を書き、グループで読み合う。 ・ じんざの気持ちの変化	T 勉強したことをもとに、この場面のじんざの気持ちを自分の日記に書きましょう。 ○ なかなか書き出せない児童がいる場合、その児童の思いを聞きながら板書からじんざの気持ちを1つ選び、それを書き出しとして日記を書くことができるようにする。 ◎ 話合いで読み深めたことを基につくった自分なりの読みを日記に表現している。(日記)
4 本時の振り返りをする。 ・ 学習のめあて対して ・ 友達の考えについて	○ 2つの観点についてそれぞれ一文で表現し、発表するよう促すことで、学び合いのよさを共有できるようにする。
次時の学習	お客役になったつもりで、じんざの心の中を語る会で話す内容を書き、グループでの発表準備をする。

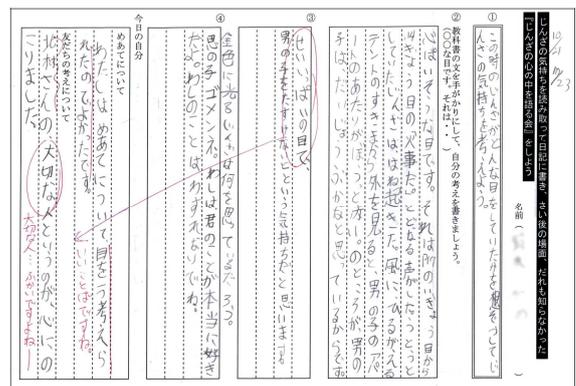
8 研究協議会の内容

(1) 単元を貫く言語活動について

第三次の“じんざの心の中を語る会”に向けて、毎時間じんざの気持ちを日記に書きためるという言語活動は、教材文を読む意欲を持続させるとともに、じんざの気持ちの変化を読み取る必然性を児童に生んだことは確かである。その意味ではとても有効であったといえる。また、日記を書く活動と交流は、各自の読みを深めるだけでなく、読みの修正を行うための学習にもなった。

(2) 目の表現に着目して気持ちを読み取ることについて

じんざの目の表現に着目し、なぜそのような目なのか、叙述を基に気持ちを読み取る学習を展開したが、これが児童の切実な課題になっていたかという疑問である。確かに、前時までの目の表現があるときの児童は、とても活発に意見を出していた。しかし、本時のような目の表現がない場合、それを自分で考えながら、しかも気持ちを想像することは大変難しかったようで、話合いが停滞してしまった。これは、「暗示」にかかわる学習内容で、学習指導要領解説では高学年に記載されていて、3年生には難しい学習内容だったという指摘を受けた。しかし、どうしても目の表現にこだわって授業をするのであれば、まずは叙述を基にじんざの心情を読み取り、その後から考えることもできたのではないかという意見がワークショップで多く出された。



(3) 書く活動について

今回使用したワークシートは、書くスペースが大変多く、3年生の児童には抵抗感があるのではないかという指摘があった。しかし、児童は今年度当初から、ノートに行数に合わせたこのワークシートを適宜使用しており、これに自分の考えを書くことに慣れていたので、分量はまちまちでも、それぞれがしっかりと書き込むことができていた。1学期に実施した他学年の授業研究から、本校の児童には「自分の考えを書く」ことに課題のあることが明らかになっていたので、あえてこういう取組を継続してきた。もちろん書く前に読む力も必要なのだが、これまでの取組により、一定の成果は得られたと考える。

また、本時の学習活動3で意見交流する際には、参考になる友達の意見をメモする姿も見られ、学びの積み重ねが重要であることを再認識した。

(4) 話合い活動について

「書く→話し合う」の一サイクルを、本時では様々な学習形態（グループでの対話と発表、フリートーク、グループを変えての意見交流）を用いながら3回行った。その結果、気付きや深まりがワークシートや日記に書き残され、これが、自分なりの読みをつくったり、その変容を自覚したりすることにつながったと考える。

フリートークについては、どの児童も進んで意見を述べることはできるが、今どういいう話合いになっているのかを確認したり、疑問を出し合ったり、何かにこだわって考えを深めたりするには、依然として教師の支援を必要とする。一方で、児童は、教材文をしっかり読み取り、読み取ったことを進んで表現しようとする意欲的な学習集団へと成長してきている。このような児童であるからこそ、さらに質の高いフリートークができるようにしたい。そのために、授業はもちろん朝学習なども有効に活用し、リーダーを中心としたフリートークを進めていきたい。